

# 満州事変をきっかけに 日中全面戦争へ



軍部が力をつけた日本は、中国東北部での権益のため満州国を建国。さらに日中全面戦争へ突入した。

## 満州国の建国で 日本、国際連盟脱退へ

第一次世界大戦を機に急速な経済発展を遂げた日本だったが、戦後は一転して不況に陥り、1918年には米騒動が起こるなど、労働争議や農民運動が激化していた。27年に金融恐慌が起こり、ついで世界恐慌(P132参照)に巻き込まれると社会不安が増大し、国内では軍部や右翼が勢力を伸ばしはじめた。

対外的にはワシントン体制を維持しながら中国東北部で権益を拡大していた日本だったが、蒋介石による北伐(P131参照)が進むと、その影響が及ぶことを恐れた関東軍が軍閥の張作霖を列車ごと爆破して殺害し、31年に柳条湖事件をきっかけに満州事変を起こし、東北部を占領した。さらに翌32年には清朝最後の皇帝(宣統帝)であった溥儀を迎えて満州国を建国した。しかし、国際連盟はリットン調査団の報告に基づき満州国を独立国とは認めず、日本は33年に国際連盟を脱退した。

## 第2次国共合作で 日本に対抗する中国

一方、中国国内では、蒋介石が共産党への攻撃を続けていた。根拠地の瑞金を追われた共産党軍は長征(大西遷)の末に延安を新たな根拠地とし、党内では毛

沢東の指導者としての地位が確立していた。共産党は1935年に、内戦の停止と抗日統一戦線の結成をよびかける八一宣言を出したが、蔣はこれを無視した。しかし、内戦に反対する張学良が西安で蔣を軟禁(西安事件)したことを機に、37年9月、第2次国共合作が成立した。

この時期、日本では二・二六事件などますます軍部の力が強まり、ドイツ、イタリアの枢軸国との関係を深めるとともに、中国での勢力拡大を急いでいた。そして第2次国共合作成立直前の37年7月、盧溝橋事件をきっかけとして中国との全面戦争(日中戦争)に突入した。

日本軍は上海、広州のほか、首都の南京を占領したが、多数の捕虜や一般市民を殺害し、国際的な非難をあびた(南京事件)。中国国民政府は重慶に移って抗戦を続けたほか、共産党は農村や山岳地帯でゲリラ戦を展開。都市とそれを結ぶ鉄道という「点と線」の支配しきれなかった日本軍は次第に行き詰まるようになっていった。

## 第2次国共合作の 立役者張学良

父の張作霖を爆殺されたのち国民党政府に合流し、陝西省北部で共産党軍を包囲していた張学良だが、共産党の一致抗日のよびかけに呼応し、西安を訪れた蒋介石を軟禁。周恩来らとともに蔣の説得にあたり(西安事件)、第2次国共合作を実現した。その後、張は事件の責任を問われて禁固刑を受け、戦後も台湾で軟禁状態におかれた。張の名譽が回復したのは1990年代になってからであった。

## Key Word 長征(大西遷)

国内平定を唱えた蒋介石の率いる国民党軍はたびたび共産党を包囲した。1934年、根拠地の瑞金を放棄した共産党は延安を目標として長征を開始。国民党軍との戦闘をくり返しながら、1万2500kmにも及ぶ苦難の旅を続けた。長征途中に開かれた遵義会議(じゅんぎかいぎ)で、毛沢東の党内での指導権が確立した。